常葉大学外国語学部紀要〈特集論文〉
第37号　　2021.3.　　19頁～　28頁

木宮泰彦『日支交通史』中国語訳とその学術的影響

The Academic Contribution of the Chinese translations of KIMIYA Yasuhiko, *The History of Japan-Sino Exchange*

尤　淑　君（著）*，岡　﨑　滋　樹（訳）**
YU Shuchun (Auth.), OKAZAKI Shigeki (Trans.)

（令和二年十一月六日受理）

抄　録

一九七二年に日中国交正常化が達成され、両国の関係は改善を見せた。近年、日中両国の学術交流は更に顕著な発展を遂げている。木宮泰彦は日中文化交流史研究の開祖として、学術界における影響力は多大なるものであった。ただし、惜しむらくは、現在中国の学術界では木宮の初版訳である『中日交通史』（陳捷訳、上海：商務印書館、一九三一年）が主に使われており、一九八〇年に胡錫年が増補改訂版を翻訳した『日中文化交流史』（北京：商務印書館）は広く参考にされていない。これについては、木宮の研究成果が十分に生かされているとは言い難く、非常に悔やまれる点であろう。

キーワード：中日交通史、日中文化交流史、陳捷、胡錫年、日中関係史

* 中国浙江大学歴史系・准教授、博士後期課程指導教員、第三期之江青年社科学者。本稿執筆にあたっては常葉大学から協力を得た。特に記して感謝申し上げる。
** 立命館大学経済学部・初任研究員。

一、木宮泰彦と『日支交通史』

木宮泰彦（一八八七年～一九六九年）は日本の著名な教育者であり、日中文化交流史研究でもその名は広く知られている。主な著作は、『日支交通史』、『日本古印刷文化史』、『日華文化交流史』（日支交通史の増補改訂版）等が挙がる。木宮は、日中両国の文化交流史の新たな領域を開拓し、とりわけ宋代の日中文化交流史研究を中心に、日本の僧侶たちが中国で学び、それによって活発となった両国の仏教交流の実態解明に力を注いできた。こうした研究成果は、『日宋関係』、『日本喫茶史』、『栄西禅師』等の大作を通じて発表され、これらは宋代史研究の結晶である。その生涯で多くの優れた研究成果を残し、研究内容も極めて精緻なものであった。

歴史研究者として華々しい功績を残した一方で、木宮は優れた教育者でもあった。一九一三年に東京帝国大学文科大学史学科を卒業すると、山形高等学校や水戸高等学校、さらに静岡高等学校で教鞭を執り、長い教員生活を送る。一九四六年には静岡高等学校長事務取扱を退官し、静岡女子高等学院を設立して、本校は後の常葉大学の前身となった。木宮は日中交流の橋渡し役となり、多くの優れた研究成果と教育界での活躍が高く評価され、一九四五年一月には日本政府から勲三等瑞宝章を受け、従三位に叙されている。長年、日中文化交流とその研究に尽力してきたが、一九六九年に惜しまれつつ逝去した（享年八二歳）。

中国で広く知られる木宮の代表的著作は、一九二六～一九二七年に出版された『日支交通史』である[1]。本書は、江戸時代までの日中両国を往来した人々の記す著作を時系列で整理・分析し、戦前日本で発表された対外関係史研究では、極めて優れた学術水準を誇る専門書の一つと言えよう。そこでは、遣隋使、遣唐使、留学生、留学僧や、日本に帰化した中国人僧侶等の豊富な活動記録と文字史料が丹念に精査され、二〇〇〇年以上にわたって展開された両国の文化交流の実態とその影響が明らかになっている。

『日支交通史』は当時日本国内の学術界で高い評価を受けたものの、木宮は史料の不足を悔やみ、補足・改訂する必要を感じていた。幸いにも、木宮は一九四〇年に文部省から中国視察調査に派遣され、この好機を生かして過去に入宋、入元、入明僧が訪れた江南地域の禅寺（五山、十刹）などを周り、残された史料を精力的に収集した。そして、現地で集めた史料を駆使して『日支交通史』の加筆修正に着手し、およそ三年もの時間を費やし、同書の増補改訂版原稿を完成させた。

一九四三年に完成した増補改訂版原稿は、一九二六年に発表した初版と比較してその内容と体裁が大きく改善されており、文化交流面の紙幅も約三分の一程度増え、これまで未知であった日中両国の僧侶による相互交流の史的展開が明らかになっていた。しかし、完成した原稿は不幸にもアジア・太平洋戦争中の東京大空襲で焼失し、長年心血を注いできた玉稿が水の泡と帰してしまった。戦後になって木宮は『日支交通史』をもとに、辛うじて残された一部原稿と史料を使い、あらためて執筆に励む。一九五五年になり、ようやく『日華文化交流史』として増補改訂版が出版さ

[1] 木宮泰彦『日支交通史―上・下巻』（東京：金刺芳流堂、一九二六～二七年）
[2] 木宮泰彦『日華文化交流史』（東京：富山房、一九五五年）。

れたのである[2]。

二、『日支交通史』中国語訳の出版と翻訳者の人物背景

木宮の『日支交通史』は戦前の著書であり、初めて日中両国の文化交流史を系統的に論証した専門書として、出版後間もなく中国の学界で注目を浴び翻訳された。一九三一年から二〇一八年までに、中国・台湾で全文翻訳あるいは部分翻訳として出版された『中日交通史』と『日中文化交流史』は計一〇種にも上る。そのうち九種は陳捷の翻訳であり、残り一種は胡錫年の翻訳である。中国語訳出版の系譜をまとめると表1の通りになる。

表1からも分かる通り、陳捷訳『中日交通史』（上海：商務印書館、一九三一年）は、概して中国語版の権威的な底本になり、影響は極めて大きい。一九三一年になって出版された陳捷の訳書は非常に好評だった。一九三五年には商務印書館の『万有文庫』にも採用され、廉価で読み易く、中国の一般読者から広く愛された[3]。当時商務印書館で務めていた王雲五は、「今や社会の改革が大いに進展し、様々な新しい思想や学術、事業が起き、それはまるで雨後の春筍のようであり、瞬く間に変化を遂げている」という世間の状況を鑑み、あらためて百科全書を編纂することを決定する。そこでは、向達、竺可楨、陳捷、程瀚章、胡衡臣、黄静淵、王憲民等が編集委員を担当した。

王雲五が企画した『万有文庫』は大英百科全書や日本大事典、および米国百科全書を主な底本とし、編訳と校正・改訂を経てようやく完成した。それはまさに、二〇世紀前半において最も影響力のある、且つスケールの大きい近代叢書と言え、王雲五は「如何なる個人あるいは家庭でも、ないしは新しい図書館でも、最も経済的且つ系統的に、それを手軽に揃えることができる」[4]とした。まさに王の壮大で強い志があったからこそ、困難な非常時下にあっても一七一〇種・四〇〇〇冊もの図書を編集した叢書を刊行することができたのである。ここから、当時の王雲五等編集に携わった人々の、教育や文化を以て強国と為すという決心を窺い知ることができよう。また、王と商務印書館が成し遂げた偉業は、アメリカ *The New York Times* 紙上においても、「苦難の渦中にある中国に爆弾ではなく書籍を授けた」とされ、さらには「知識とは何かを明確にし、知識を伝播する上で最も野心的な努力である」と称賛されたのである[5]。

一九五五年に木宮は先の『日支交通史』を加筆修正した『日華文化交流史』を出版した。だが、冷戦の影響で中国は国際社会で孤立し、東アジアの国々との交流も制限されていた。そのため、中国の学術界では、多くの新しい学知に触れることが困難な状況

[3] 陳捷が翻訳した『中日交通史』は、一九三五年に商務印書館『万有文庫』に編纂された際、冊数は二分冊から七分冊に増えた。このため、後に王輯五（一八九九年～没年不明）によって『中国日本交通史』として一冊に縮編され、それは『中国文化史叢書』第二輯にも収録されている。同書は中国で幅広く読まれ、高く評価されている。王輯五（編著）『中国日本交通史』（上海：商務印書館、一九三七年）。

[4] 王雲五「印行〈万有文庫〉縁起」、梁由之（主編）『夢想与路径（1911—2011百年文萃）』（第一巻）（上海：商務印書館、二〇一一年）、二五三—二五四頁。

[5] 劉正剛「出版界翹楚王雲五」、『粤商好儒』（広州：中山大学出版社、二〇一六年）、五七頁。

表1、木宮泰彦著作の中国語版の系譜

	書名	訳者	出版社、出版年	原著	付記
①	『中日交通史』（二冊）	陳捷	上海：商務印書館、一九三一年	『日支交通史―上・下巻』（東京：金刺芳流堂、一九二六～一九二七年）	第一版
②	『中日交通史』（二冊）	陳捷	上海：商務印書館、一九三二年	同上	「国難後第一版」と表記有
③	『中日交通史』（七冊）	陳捷	上海：商務印書館、一九三五年	同上	万有文庫第二集
④	『中日交通史』（七冊）	陳捷	台北：台湾商務印書館、一九六五年	同上	台湾第一版
⑤	『中日交通史』（一冊）	陳捷	台北：三人行出版社、一九七四年	同上	曹永和文庫
⑥	『中日交通史』（一冊）	陳捷	台北：九思出版社、一九七八年	同上	台湾第二版
⑦	『中日佛教交通史』（一冊）	陳捷	台北：華宇出版社、一九八五年	陳捷訳『中日交通史』（一九三一年版）中から仏教関係部分を抽出したもの	世界佛学名著訳叢第49冊
⑧	『日中文化交流史』（一冊）	胡錫年	北京：商務印書館、一九八〇年	『日華文化交流史』（東京：冨山房、一九五五年）	
⑨	『中日交通史（節選）』（一冊）	陳捷	貴陽：貴州大学出版社、二〇一四年	『中日佛教交通史』（台北：華宇出版社、一九八五年）	現代世界佛学文庫
⑩	『中日交通史』（七冊）	陳捷	太原：山西人民出版社、二〇一五年	『日支交通史―上・下巻』（東京：金刺芳流堂、一九二六～一九二七年）	国家出版基金項目（近代海外漢学名著叢刊・中外交通与辺疆史）

出典：中国・国家図書館、台湾・中央研究院傅斯年図書館、台湾・国立政治大学図書館より筆者作成。

にあった。しかし、一九七二年の日中国交正常化と共同声明発表を経て、『日華文化交流史』中国語訳はようやく正式に出版される機会に恵まれたのである。

同書訳者の胡錫年（一九一三年～一九九六年）は浙江省海塩の出身で、日中関係史と日本史研究の著名学者である。学生時代は浙江大学で学んでいたが、政治的に危険視されるサークル活動に参加したため学校側から除籍され、すぐに清華大学英文学部に再入学した。一九三八年に西南連合大学を卒業すると、昆明や上海および重慶等の地方新聞社を転々とし、編集や記者として数多くの雑文と訳文を発表している。こうした経験を通じて、彼は徐々に学術研究の道を歩みはじめていく。一九四五年になるとロンドン大学へ留学し、外交史と政治経済学を専攻する。一九五〇年に帰国し華北人民革命大学で学び、蘭州大学英文学部准教授の職に就くと、その後は西北大学師範学院や陝西師範大学歴史学部で准教授および教授として教鞭を執った。また、中国日本史学会常務理事兼中日関係史分会長、中国中日関係史研究会常務理事兼秘書長、中国中外関係史学会理事を歴任し、日本でも国際基督教大学の特別招聘教授等も務め、国内外の学術界では名の知れた学者であった。主な業績に『日本近代史』、『対華回憶録』、「古代日本対中国的文化影響」などの数十編の翻訳・論著がある[6]。一九五五年に木宮が『日華文化交流史』を出版した後、胡はあらためて同書を翻訳・出版しようと志すが、一九六六年から一九七六年の文化大革命の混乱によって中国学術界も荒れ果て、胡錫年自身にも迫害が及ぶ。一九八〇年に胡は名誉回復され、ようやく『日中文化交流史』として商務印書館から出版されたのである[7]。

『日中文化交流史』は約七〇万字にも上る大作であり、その内容は精緻な実証に裏付けられ、使われる史料も膨大な量であった。中国の学者にとっては空前の整合された重要参考書であり、日中関係史研究の発展を大きく後押しした。しかし一方で、胡は木宮の著作で補足すべき点も指摘し、それは日本の史学界で多くの反響を呼んだ。一九六五年に『日華文化交流史』が再版された際、日本の学術界では多くの新しい研究成果が生まれていたが、この時木宮はすでに高齢で体力的にも衰え、こうした新たな成果を取り入れてさらに増補改訂するには至らなかった。これは木宮が遺憾としたところであり、日中両国の学術界にとっても極めて重要な残された課題だった。

その他にも、木宮の史料分析には若干の誤りが見受けられ、それは二次史料が原史料と照合されていないことにも原因があったのであろう。また、時期や年号等の誤記も含め、これら問題点は胡が後に発表した、「隋唐時代中日関係中的二三事」、「古代日本対中国的文化影響」、「唐代的日本留学生」、「中日両国在歴史上相互瞭解程度的比較」、“Recent Chinese Scholarship on Japan”等の一連の論文で修正されている。胡はさらに木宮が築いた基礎に立って、これら日中関係史の若干の重要課題を更に踏み込んで精査し、国内外の学術界における多くの定説を覆した。それは現在の中国学術界でも依然として度々参考にされ、広く共有されて

[6] 江西人民出版社編『浙江古今人物大辞典（下）』（南昌：江西人民出版社、一九八八年）、六三〇頁。

[7] 小石「胡錫年教授」、『陝西師大学報（哲学社会科学版）』一九九〇年〇一期、二頁。

いる[8]。陝西省档案館が、一九九七年三月に胡錫年関連の档案と著作を「陝西名人档案」として所蔵することを決定したのは、まさに胡の学術的地位および彼の日中関係史研究における多大な影響力を物語っていよう[9]。

三、木宮泰彦が中国学術界に与えた影響

木宮の訳本『中日交通史』と『日中文化交流史』は、日中関係史研究における必読の古典であるのみでなく、その成果は長年中国学術界で高く評価され続け、『中日文化交流事典』に関係項目も立てられた[10]。現在に至るまで中国の学界や出版界が重視し、出版各社による上梓が相次ぎ、購入する人も多い。ここからも木宮の中国学術界における影響力を知ることができよう。あらためて数値を用いてその影響力が如何ほどであったかを示すと、より一層木宮の功績が明確に説明し得るのではなかろうか。

参考までに、図1には中国において木宮の中国語訳著作を参照・引用した論文数の年度別統計を挙げている。ここから、中国学術界では早くから木宮の傑作が参照・引用され、近年でも引き続き重宝されていることが分かろう。特に一九七六年の文化大革命終結、一九八九年の改革開放、二〇〇四年の日中尖閣問題という重要な動きが発生すると共に、参照・引用数もそれに呼応した変化を見せており、三度の増加転換点が看取される。この三大画期は、中国の内政面で変化が生じ、外交でも改革が求められた時期に該当し、間接的に日中文化交流研究の重要性を示唆する結果となっていよう。

図2は木宮の訳本を参照・引用した論文のテーマ別統計結果であり、中国史がその主要分野となり、それに世界史が続いている。木宮の極めて優れた研究成果とそれを裏付ける豊富な史料は、中国史研究者にも広く共有されていることが分かろう。図3は同じく論文執筆者別統計であり、その中の多くの著者が中国の重点大学出身であり、また著名学者でもある。例えば、陳尚勝、韓東育、範金民等は中国学術界が公認する優秀な文系学者であり、中には長江学者（中華人民共和国政府の認定する優秀な学者）に選ばれ、国から専門家待遇を受けた者もいる。図4は論文執筆者が獲得している中国政府研究助成金の種別統計である。木宮の訳著を参照・引用した研究者の多くは決して無名ではなく、論文も政府の助成金を受けて執筆され、大学から地方政府、そして中央部会までの数回の審査を経て発表されたものである。木宮泰彦の功績はまさにこうした優れた研究成果の基礎となり、中国学術界における多大な影響力が看取されよう。

---

[8] 汪向栄「他山之石—評胡訳《日中文化交流史》」、『読書』一九八一年一月四九—五一頁。

[9] 邵継勇「新中国日本史研究述略」、『中国中日関係史研究』二〇一二年第二期、六九—七一頁。

[10] 劉徳有、馬興国（共編）『中日文化交流事典』（瀋陽：遼寧教育出版社、一九九二年）、八〇二頁。『日中文化交流史』という項目がある。

図 1、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文数の年度別統計

図 2、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文のテーマ別統計

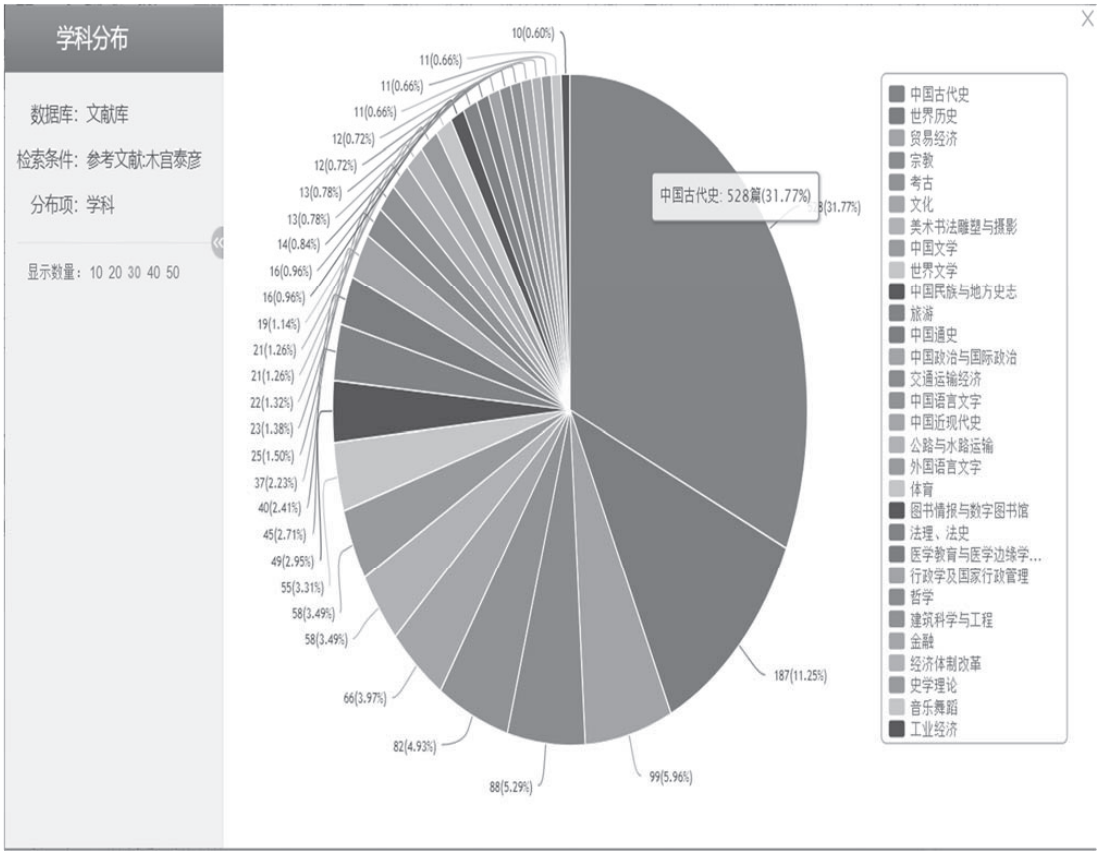
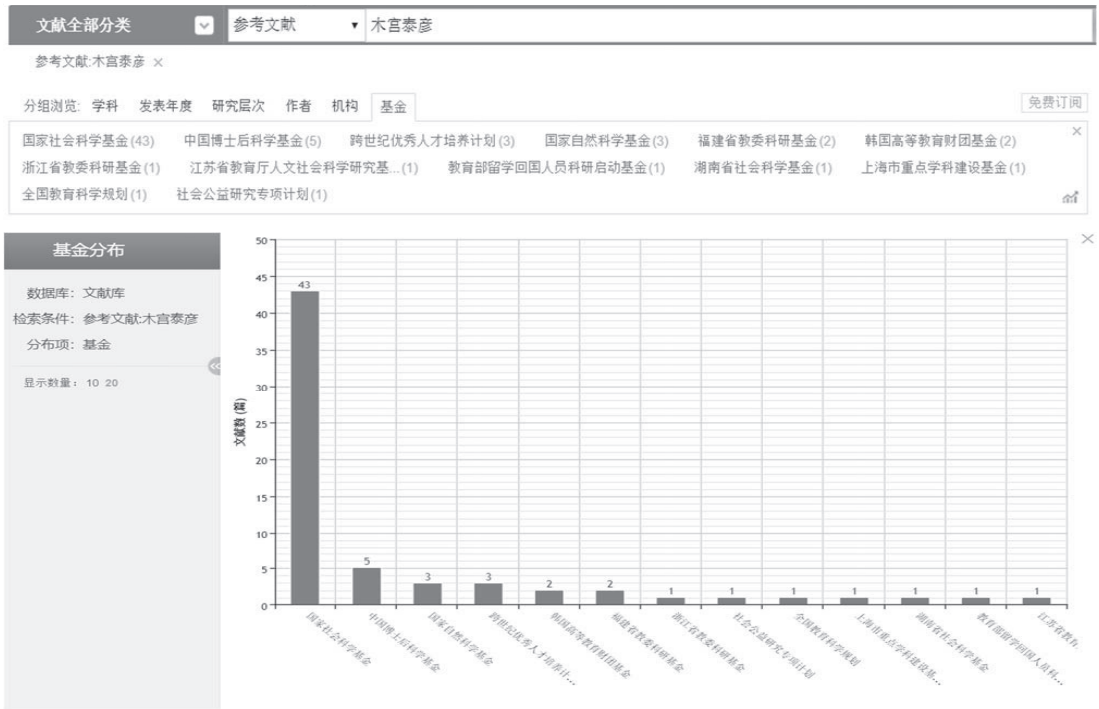


図 3、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文の著者別統計

図 4、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文の助成金種別統計（出典：CNKI 中国知網）



四、結び

一九七二年に日中国交正常化が達成され、両国の関係は改善を見せた。近年、日中両国の学術交流は更に顕著な発展を遂げている。木宮泰彦は日中文化交流史研究の開祖として、学術界における影響力は多大なるものであった。ただし、惜しむらくは、現在の中国の学術界では木宮の初版本である陳捷訳『中日交通史』（上海：商務印書館、一九三一年）が主に使われており、一九八〇年に胡錫年が増補改訂版を翻訳した『日中文化交流史』（北京：商務印書館）は広く参考にされていない。これについては、木宮の研究成果が十分に生かされているとは言い難く、非常に悔やまれる点であろう。